

『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・韓国編に見る 植民地統治：ソウル市、安重根義士記念館、独立記念館の例

Japanese Colonial Rule in 'Chikyu No Arukikata Guidebooks'
for South Korea: the cases of Seoul, the An Jung-geun
Memorial Hall and the Independence Hall of Korea

岩 田 晋 典

IWATA Shinsuke

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi university

E-mail: shinskeiwata@gmail.com

Abstract

This paper examines the representation of Japanese colonial rule in Korea in "Chikyu No Arukikata Guidebooks", one of the major travel guidebook series in Japan. Focusing on three cases, the city of Seoul, the An Jung-geun Memorial Hall and the Independence Hall of Korea, the analysis shows: 1) a similar shift of the representation of Japanese colonial rule in "Chikyu No Arukikata Guidebooks" for Taiwan occurred, 2) an objection to historical recognition in Korean society increased, and 3) a major shift took place in the beginning of the 2000s as Japanese nationalism in competition with neighboring Asian countries came to the fore.

I. はじめに

本稿の目的は、旅行ガイドブックシリーズ『地球の歩き方ガイドブック』の韓国編に焦点を当て、大日本帝国による植民地統治がどのように表象されているのかを分析することにある。現在日韓関係は、いわゆる歴史認識問題を主な原因として悪化の一途をた

どっており、「政治レベルでは過去最悪」だという¹⁾。その影響は観光の分野にも及んでいる。同じ隣国でも中国について言えば、尖閣問題に解決の見込みが見受けられないにもかかわらず、中国方面の国際旅客数は増加傾向にあるのに対して、韓国方面の旅客数は2013年4月から前年割れが続いている²⁾。また、訪韓日本人旅行者数も、李明博大統領（当時）が大統領として初めて島根県竹島に上陸した2012年後半以来、減少し続けている³⁾。訪日韓国人旅行者数も、増減があるものの、「伸び悩み」の状態だ⁴⁾。

本稿では、こうした日韓関係と観光の関わりを考察する一環として、『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの韓国編に焦点を当てて、植民地統治という集会的過去の表象に注目したい。日本を代表すると言っていい同シリーズの韓国編では、植民地統治がどのように表象され、どのように推移したのかを整理し、考察する。同種の分析はすでに同シリーズの台湾編で試みたことがある（岩田、2011）。本稿では台湾編と比較することで韓国編の特徴を把握してみよう。

以下では第一に研究の方法について述べ、つづいてソウル市、安重根義士記念館、そして独立記念館の紹介のされ方を順に分析していく。その上で、『地球の歩き方ガイドブック』台湾編の事例と比較することを通じて全体の考察を試みる。

II. 研究の方法

1. 調査データの収集対象

調査は『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの韓国編を対象に行なった（以下、韓国編とだけ呼ぶ）。「地球の歩き方」にはさまざまなシリーズがあり、また同シリーズにはソウル編や釜山編もあるが、韓国編が最も出版年数が長い。

韓国編は初版（1986年）から第28版（2014年）まで計28点刊行されている⁵⁾。ただし、初版は入手が困難であるため、残念ながら本稿執筆の時点でまだ内容を確認できていない。

同じことは第3版（1988年）についても言える。そのため、本研究で分析の対象に

1) たとえば2014年6月24日付け朝日新聞「(対談) 日韓の緊張、メディアの役割朝日新聞・大野博人×東亜日報・黄鎬澤」における東亜日報論説主幹黄氏の言葉。

2) ウェブ経済紙『AviationWire』「続く韓国の前年割れ、中国は12カ月連続前年越え14年7月の航空輸送統計」(2014年10月3日)。

3) 2014年7月5日付け毎日新聞「日韓観光:改善なるか訪韓日本人客、関係悪化で急減「怒られっぱなし」展望見えず」。

4) 2014年8月23日付け朝日新聞ウェブ版「日韓観光、立て直しへ官民がソウルで会議」。

5) 本稿で「第●版(●●年)」と記した場合の西暦は出版年を示す。『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの表紙に記載された暦年ではない。また、同シリーズからの引用については、たとえば(●頁)というように、ページ数のみを記載する。煩雑さを避けるためである。

したのは、上記2点をのぞく、1987年の第2版から第28版までの26点である。

2. 分析の対象

韓国編における日本の植民地統治に関する観光対象の表象には、年を経るにつれて分量が減少したり、記載自体が消失するものもあれば、逆に増加するものもある。本稿では、次の代表的なトピックを軸に考察を進めた。

(1) ソウル市

旅行ガイドブックにおいてある地域がどのように形容されているかに注目することは、そのガイドブックの心象地理を理解するうえで不可欠の作業である。「地球の歩き方ガイドブック」シリーズでは大抵の場合、都市や街、名所などのエリアを紹介する冒頭の箇所で、その場所の概要が示される。

植民地統治時代に総督府が置かれたソウル市は、周知のごとく「韓国第一の入り口の都市」として韓国観光に欠かせないエリアである。

(2) 安重根義士記念館⁶⁾

安重根は、いわゆる歴史認識問題において重要な役割を果たしている。2014年はそれがひとときクロースアップされた年でもあった。1月に中国ハルビン駅に安重根義士記念館が開館しているが、それに至る経緯は、まず韓国政府が同駅に安重根の記念碑を建てることを中国政府に要請したのに対し、中国側が「巨大な記念館」を建設したというものであった(2014年7月4日付け朝日新聞)。つづく6月に朝日新聞と東亜日報の論説主幹が「過去最悪」の日韓関係に対してメディアが果たす役割について行なった対談でも「最も熱く議論」されたのは安重根についてである。

本稿執筆中には、仁川広域市で第17回アジア競技大会があり、サッカー男子準々決勝、日本―韓国戦の試合会場で、安重根の顔が描かれた旗が掲げられるという出来事があった。10月1日付けの読売新聞ウェブ版によれば大会組織委員会は「韓国代表のサポーターに再発防止を要請した」という。

このように、安重根という人物は、慰安婦問題と同様に日韓関係について考える上でカギとなる存在であり、それをふまえ、本稿ではソウル市南山にある安重根義士記念館を取り上げた⁷⁾。

(3) 独立記念館

天安市に位置する広大な独立記念館は1980年代の歴史教科書問題をきっかけに建設

6) 韓国編の中には同館に対して「紀年館」という表記を用いるものがあるが、本稿では韓国観光公社の表記にならって「記念館」で統一する(韓国観光公社公式サイト「南山公園」、http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_1_1.jsp?cid=281211 : 2014年10月6日閲覧)。

7) 韓国編で「慰安婦」の文字を見つけることはきわめて難しい。たとえば、慰安婦に関する歴史館「ナムムの家」(京畿道広州市)が韓国編で紹介されることはないようだ。

されたものである。同館は、韓国観光公社のウェブサイトで次のように紹介されている⁸⁾。

1987 年、8 月 15 日の光復節に合わせて開館したこの独立記念館(トンニプキニョムグァン)は韓国の独立運動と独立運動家たちに関する資料を展示した場所で、中国・上海と重慶にある大韓民国臨時政府庁舎を復元したものです。

日本帝国の侵略と独立運動を経て大韓民国臨時政府を樹立するまでの過程を記録した7つの展示館があるほか、9面の大スクリーンがある円形劇場があります。他にも野外にも独立を記念する多様な施設があります。

ここでいう「日本帝国の侵略」には、文禄・慶長の役(壬辰倭乱)も加わっており、同館の展示は近現代史に限られたものではない。

よく知られるように、大日本帝国の植民地統治に関する展示には、韓国人に対する拷問シーンを再現したものがある。インターネットでこの展示への批判を見つけることは容易い。けれどもその一方で、同館について肯定も否定もせずに単に訪問を報告するサイトや、さらに踏み込んで訪問を勧めるサイトも散見される。本稿では、日本社会で評価の割れる同館に注目してみた。

Ⅲ. ソウル市

1. 侵略への言及とレスペクト

第2版(1987年)のソウル市のエリアガイドは、ソウルのさまざまな「顔」——高層ビル群、韓式家屋、街中の軍隊、繁華街、アジュマがいる市場、そして若者の街——を列挙することで始まり、その後に「ソウル、その華麗なプロフィール」という一節が続く(図1)。この「プロフィール」の箇所では、ソウルの歴史が短くまとめられており、以下の記述が見られる。

ソウルは漢陽府^{ハニヤン}といわれ、朝鮮王朝27代、519年間の王都として反映し続け、36年に渡る日本の支配を乗り越え、大韓民国^{テハンミングツ}の現在に至っている。その間、イムジンウエラン(豊臣秀吉の朝鮮出兵をさす)戦争をはじめとして、数多くの戦火に見舞われた。(114頁)

ソウル市の歴史を簡潔に述べる中で、歴代王朝とともに朝鮮出兵と大日本帝国による

8) 韓国観光公社ウェブサイト「独立記念館」

http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_1_1.jsp?cid=1086177 : 2014 年 10 月 6 日閲覧。

植民地支配が言及されている点が興味深い。ともに日本が朝鮮半島に対して行なった侵略である。

この第2版には、植民地期に用いられた名称「京城」に関する記述もある。「My name is Seoul!」というタイトルで、「京城という呼称」が「日本統治時代のものでしかなく、韓国の人々にとっていい思い出ではない」(123頁)と指摘し、それに対して「ソウル」という「純韓国語」の名称を使うことが勧められる。

ここで、ソウルという都市が擬人化されていることは注目に値する。「ソウル」という人物が「My name is Seoul!」と名乗っていることに敬意を払うべきだと主張されるのだ。すなわちそれは、対話者その人自身による自己同一性を尊重すべきという姿勢である。この「My name is Seoul!」の箇所は、第4版(1989年)ではソウル市のエリアガイドの冒頭に加えられ、ソウル市のページを開いた人が最初に接する情報の一つという位置づけを得ることになる。

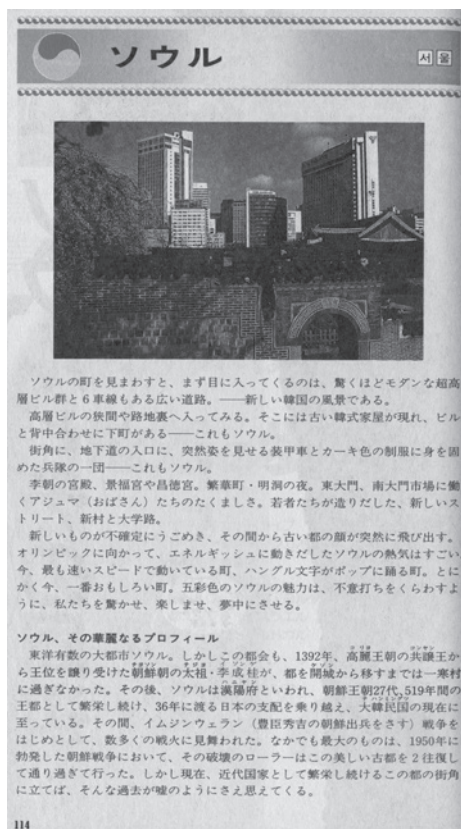


図1 第2版(1987年)のソウル市の紹介文

2. 歴史を持つメトロポリス

こうした記述内容は、「渡る」が「わたる」に変換されるなどわずかに変化するだけで、第16版(2001年)まで維持されていくが、続く第17版(2002年)からは植民地期に関する記述は皆無となる。むしろソウル市は「600年にわたって都として栄えてきた都市韓国首都として今なお発展を続ける」都市、「拡大を続けるメトロポリス」であり、その過去から現在へつらなる栄華が讃えられるだけだ(46頁)。

2年後の第18版(2003年)では当該のページに小さなソウル市庁舎の画像が加わる。言わずと知れた旧京城府庁舎である。けれどもキャプションには「1926年建築」とあるだけで、植民地統治を連想させる言葉は含まれていない(46頁)。

3. 日本との関わり

このようにソウル市の説明文では、第17版をさかいに植民地統治に関する文言が消

えるのであるが、同版からソウル市の鐘路地区を紹介するパートに「日本統治」という言葉が出現する。

ソウル中心部の北側に広がっているのが鐘路エリア。古くから商業地区として栄え、日本統治下でも民族系繁華街の地位を守っていた所だ。大通りには企業や銀行の本店といった大きなビルが建ち並ぶが、一步裏通りに入ると昔ながらの飲食店が残っていたりするのをおもしろい。(80 頁)

こうした言及、すなわち地区の説明文の中で植民地統治期に関して短く触れるという記述は、第 20 版 (2005 年) にも現れる。明洞のパートでは、現・明洞芸術劇場の小さな画像が記載され、「日本統治時代は明治町と呼ばれ、日本人町だった」というキャプションが加えられている。同じ 20 版の梨泰院のパートには以下の記述が見られる。

梨泰院・龍山は軍事基地とともに発展したエリア。日本統治時代は日本軍の大規模な施設が設けられており、戦後は米軍がそれを接收して使い続けてきた。(106 頁)

これらの「日本統治」への言及は最新号の第 28 版 (2014 年) まで継続している。先に植民地統治に関する部分が減少すると述べたが、それを踏まえると、日本との関わりが増加している事実は逆説的である。この点については後で再び取り上げたい。

IV. 安重根義士記念館

1. 贖罪と推薦

安重根義士記念館は第 2 版 (1987 年) では半ページものスペースを割いて紹介されているが、その後は前節のソウル市の紹介文に見られる推移と類似した変化を見せる。すなわち、徐々に分量を減らしつつ内容にも変化を見せ、第 24 版 (2009 年) 以降は姿を消すという変化である。

第 2 版の記述は、書き手の経験や個人的な思いを含んだものになっている。後の韓国編の記述と比べると大きな違いがあるので、少々長くなるが、全て引用しよう。

「千円札の人が夏目漱石に変わって、本当にホッとしている」——韓国人の友人に向かって思わず、そんなことばをもらしたことがあった。かつての千円札の人——
イ・ドンバンムン
 —伊藤博文— 初代朝鮮統監として君臨し、日韓併合の仕掛け人——多くの韓国人に、そして日韓の歴史いやし難い傷を残した人——そんな人が描かれているために、

韓国の友人達とはたかだか千円札1枚のやりとりにさえ、不要な、不愉快な緊張を感じることもあった。

伊藤博文、彼が朝鮮に行った功罪について知る日本人は少ない。そして、その伊藤博文を1909年、ハルビン駅頭で倒した男、安重根について知る人はほとんどいない。

安重根は単なるテロリストではなく、相当なインテリゲンチヤであったことで知られている。この記念館には、彼の筆による書、写真、当時の法定記録がが（ママ）表示されており、彼の抗日運動の足跡をたどることができる。

この記念館は1970年、安重根義士の偉業をたたえるソウル市民の募金によって建てられた。

記念館の前に旗を持って進む安重根の像、そして記念碑の文字「民族正気の伝堂」は故朴正熙大統領の筆による。

ここはほとんどの観光ガイドからは（故意なのか？）外されているようだが、日本と韓国を新しい視点に立って考えようという若い人達にはぜひとも立ち寄って欲しい。（有料）ちなみに、伊藤博文に対し、安重根はお札になっていないが、W200（普通）切手になっている。（136頁）

この記述は、伊藤博文について書き手（日本人）が感じた居心地の悪さ、次に安重根と同館の概要、最後に訪問の推薦という三部構成に大きく分けることができる。

「そんなことばをもらしたことがあった」という部分は、「多くの韓国人に、そして日韓の歴史いやし難い傷を残した人」をめぐって友人との間にいさかいが生じるのを避けたいという個人的な配慮から来たものと解釈することも可能であろう。けれども、そもそもこの文章が韓国人にとって「偉業」をなした「義士」の記念館の紹介文の一部であること、また伊藤博文に現地発音のルビが振られ、韓国の立場を尊重する必要性を示していることを考慮に入れると、この居心地の悪さはいわゆる贖罪の気持ちから来たものだと解釈すべきである。

2. 基本的な情報への収斂、評価の揺れ

第5版（1990年）では、以上の記述のうち贖罪に関する部分と最後の推薦の部分が削られて、安重根と記念館自体の説明に絞られる。いわば、特別扱いから脱して、他の観光名所と同じ位置に落ち着くということだ。

さらに大きな変化を見せるのは第16版（2001年）である（図2）。この版から各観光名所紹介部分にサブタイトルが加えられる。同館の場合、「民族の英雄・安重根のすべてがわかる」である。

南山公園にある。安重根は植民地時代の初代統監伊藤博文を中国ハルビン駅で暗殺した人物として日本でも知られている。義士と呼ばれる民族の英雄として尊敬されている彼の素顔を知る日本人は少ない。

法定で裁きを受け中国の旅順監獄で処刑されるが、獄中では堂々とした態度で『東洋平和論』などの序文を掲げた。当時の看守・千葉十七は彼の態度に感銘を受け処刑後も遺徳をしのび続けた。

記念館は1970年にソウル市民の基金によって建てられた。記念館はそれほど大きくないが写真や新聞記事などで説明されている。単なるテロリストではなく独立運動家としての彼の姿が見えてくる。記念館前には安重根の書を彫り込んだ碑石がいくつも建っている。(95頁)

先述のように贖罪と推薦の二要素が削られたのであるが、その一方で内容の面でも大きく変化していることが分かる。すなわち、安重根の説明が詳しくなり、彼を形容する

表現においても変化が見られるのだ。ここでは変化をより明瞭にするために、第15版(2000年)と第16版の記述を比べてみよう。

まず説明が詳しくなった点についてである。第15版では、「自筆の書、写真、法定記録などが展示され、抗日運動の足跡をたどることができる」とあり、先述の第2版とは大差はない。それに対して第16版では、この部分は「記念館はそれほど大きくないが写真や新聞記事などで説明されている」とより簡潔になっているものの、上記のように、「獄中」での逸話、著書名、日本人看守との関係が加えられている。

このように安重根自身についての説明がより充実したものになるのであるが、その一方で安重根を形容する語句の面では目を見張る変化が生じる。第一に、第16版では説明が詳



図2 第16版(2001年)の安重根義士記念館

細になった箇所では「堂々とした態度」や「遺徳」という表現が使われている一方で、第15版で見られた「抗日運動」が削除されている。

次に、第15版（2000年）まで安重根は「伊藤博文をハルピン駅で倒した人物」であったのが、上記の第16版からは「暗殺した人物」となっている。「倒す」と「暗殺する」には大きなニュアンスの違いがあることに注意されたい。

また、第15版では記念館が建てられた経緯を「彼の偉業をたたえるためにソウル市民の募金により」としているが、第16版では単に「ソウル市民の募金によって」と淡白な説明になっている。

さらに、第15版では安重根を「単なるテロリストではなく、独立運動家としてかなりのインテリであった」と描写しているのに対して、第16版では「インテリ」の言葉が無い。その代わりなのかは不明であるが、末尾に「碑石」の文章が加わっている。

第15版から第16版にかけて安重根記念館をめぐる生じたもう一つの変化としては、南山公園が独立したエリアとして扱われなくなったことがある。これにより、同館やソウルタワー、南山韓屋村など従来南山公園のエリアガイドで紹介されていた観光対象がまとめて明洞のエリアに組み込まれることとなった。南山公園のページでは、たとえ本文で説明がなく画像も小さいものであったとしても金九像の画像が掲載されていたが、それもこの併合を機会に無くなっている。

以上のように、第7版（1992年）から第16版（2001年）にかけて生じた変化として、まず、全体の説明が安重根や同館の基本的な情報に収斂した点を指摘できる。贖罪や推薦に関する部分が無くなって全体が縮小し、いわば特別扱いがされなくなると同時に、安重根と同館の説明が充実している。

もう一つが、使用される表現を通じて安重根ならびに同館に対して評価の揺れが垣間見られる点である。「堂々とした態度」や「遺徳」といった表現が用いられる一方で、暗殺者と言い換えられ、また、「インテリ」という形容や「偉業」という言葉も消失するのである。

3. 評価の抑制、そして懐疑

こうした評価の揺れは、第17版（2002年）からは評価を抑制する方向に収斂する。第16版では「民族の英雄・安重根」であったサブタイトルが第17版では「韓国で英雄とされている安重根」というように、評価が相対的なものであることを強調する言葉遣いになる。また、「植民地時代の初代統監伊藤博文」という個所は「保護国時代の初代統監伊藤博文」に書き換えられ、「植民地」という言葉が姿を消す。

似たような変化は、千葉十七に関する箇所にも現れている。第16版までは「処刑後も遺徳をしのび続けた」と終わっていた文章に、第17版では「しのび続けたという」

という伝聞表現が付け加えられている。この追加によって、誰か第三者が語ったことが強調されるようになっている。あるいは、ここに「しのび続けた」ことの確実性が減じるニュアンスを感じ取る人もいるであろう。

そして、第16版では「獄中では堂々とした態度で『東亜平和論』などの序文を掲げた」となっていた箇所が、第17版では「[堂々とした態度で]が無くなり、単に「『東亜平和論』という自著を執筆した(未完)」に変わっている。

第16版では「安重根の書を彫り込んだ碑石」が加えられたが、第17版ではこの箇所は削除され、それに代わって以下の文章が加えられる。

単なるテロリストではなく独立運動家としての姿が見えてくるが、経済的な理由から日韓併合には反対だった伊藤を暗殺し、結果的に併合を早めてしまった点といったマイナス面の評価は不足しているようだ。(95頁)

このような第17版に見られる変化、あるいはそこに表れる姿勢を、次のようにまとめることができるであろう。“安重根を「民族の英雄」とする認識には距離を置くべきだ。また、日本人が彼を慕ったという話は不確実なものである。そして、彼は併合を早める誤った行動を取った。さらに、この博物館は歴史を中立的に捉えていない偏った施設である…”

第17版から第23版(2008年)までの間にも若干の変化が見られる。まず「経済的な理由から日韓併合には反対だった伊藤」という箇所が第18版(2003年)では「おもに経済的理由から」となった点である。政治家伊藤の考え・立場がより混みいていたと示唆されている。伊藤を暗殺する誤りを犯したテロリストという安重根像も含めて考えれば、この「おもに」の追加によって安重根の“軽はずみさ”がいっそう強調されると言えるかもしれない。

また、その3年後の第21版(2006年)では、「獄中では『東亜平和論』という自著を執筆した(未完)」という文章がそっくりそのまま無くなっている。言説レベルで考えれば、かつて「インテリ」とまで形容された安重根はついには自著まで剥奪された、ということになる。

安重根記念館が紹介されることは第24版(2009年)以降ない。しかしながら最後に、第21版から同館の紹介文の冒頭に「もとは朝鮮神宮境内だった南山公園にある」という一文が加わることを付け加えておきたい。安重根が表す日韓のつながりがフェードアウトしていく中で、もう一つ別のつながりが言及されているのである。それが、朝鮮神宮という大日本帝国による植民地支配の象徴をつうじてのつながりであることは興味深い。

V. 独立記念館

1. 「ぜひ訪れてみたい場所」

第4版(1989年)には写真入り投稿記事として同館が大きく紹介されており(図3)、次のように推薦されている。

韓国から見た^{イルチュシデ}「日帝時代」を知るうえでは、行ってみる価値は十分にある。そのあとの判断は、自分自身ですることだ。一部では、怖くて行けないとの声もあるが、決してそんなことはない。(219頁)

これに続く韓国編の記述は、この投稿記事が元で作られていったようだ。第5版(1990年)では、投稿者名が無くなるが、本文には変化がない。

第8版(1993年)になると、コラムとしてボックステキストになり、分量も増大する(図3)。「日帝時代」という表現を含む上記引用箇所がそっくり無くなる一方で、全



図3 第4版(左)と第8版(右)の独立記念館

体として客観的な印象が強い紹介になる。まず柳寛順の名前が引かれ、それに7つの展示館と円形映画館の各説明が続く。そして以下の文章で締めくくられる。

現在の展示内容は共産主義者による運動を不当に低く評価しているといった問題点も指摘されているが、いずれにせよ朝鮮民族の独立運動についてこれだけの資料を集め展示している施設は他にはない。日本に深い関係と責任がありながら、日本の学校ではほとんど教えられないことのない朝鮮民族の独立運動について知るためにも、また韓国人自身が過去の歴史事実に対してどのような認識をもっているのかを知るためにも、ぜひ訪れてみたい場所である。(327 頁)

博物館的施設としての同館の評価、深い日韓関係、日本の戦争責任、日本の歴史教育問題、そして他者理解といったトピックが盛り込まれ、訪問が推奨される。このくぐり方は、博物館の問題点をわきまえた上で、自らの不足する知識を補い、かつ、他者の認識の在り方について理解を深めることを促すというものである。健全な二国間関係を築く上で不可欠な良識を感じさせる文章だと言っている。

2. 「興味深い施設」

けれども、こうした内容は第16版(2001年)に大きく変化する。まず分量の大幅な縮小である。第15版まではボックステキストで充実した説明がなされているが、第16版からは、以下のように、通常の観光対象と似たような分量の紹介になる。

国鉄京釜線、京釜高速道路上に位置する交通の要所、天安にある博物館。韓国独立運動の流れをたどることは即ち韓国の歴史、特に近現代史を総ざらえすることにもなるので、韓国近現代史博物館ともいえる施設。1980年代におきたいわゆる歴史教科書問題をきっかけに民間の基金で設立されたもので、基本的には民族意識の高揚と教育を目的としている。そのため外国人を意識したものではない分、日本警官による拷問シーンの再現など我々日本人にはショッキングな展示も多くなっている。外国人が見た場合、その内容には賛否両論あるだろうが、特に日本人にとっては韓国人一般の歴史認識や民族意識を知るという意味で興味深い施設だろう。(366 頁)

サブタイトルに「日韓関係を考えるきっかけに」とあるものの、この内容から分かるように、「基本的には民族意識の高揚と教育を目的としている」と説明して、韓国人が韓国人のために作ったものであることが強調されている。

また、同館は内容に「賛否両論ある」もので、日本人には「興味深い施設」となる。「興

味深い施設」という紹介は、この第16版だけを読めば、それなりにニュートラルなニュアンスの言葉に映るであろうが、第15版のボックステキストの内容と比べれば、第16版でのトーンの下がり具合には眼を見張るものがある。

3. 「誇張」と「賛否両論」のある施設

二年後の第18版(2003年)では、さらに分量が減る(図4)。第16版の「韓国独立運動の流れをたどることは即ち韓国の歴史、特に近現代史を総ざらえることにもなるので、韓国近現代史博物館ともいえる施設」という部分と、「外国人を意識したものではない分、日本警官による拷問シーンの再現など我々日本人にはショッキングな展示も多くなっている」という部分がともに削除されているためである。

さらに「外国人が見た場合、その内容には賛否両論あるだろうが」という箇所は、「外国人が見た場合、誇張も多いその内容には賛否両論あるだろうが」となり、「誇張」という言葉が盛り込まれている。前者の文章では、「賛否両論」の対象は「ショッキングな展示」だと読むことができるが、後者の場合は博物館の「誇張」となっている。つまり、博物館としての中立性が疑問視されているのだ。

その後同館の紹介は、「交通の要所」に関する部分が削除されたり、旧朝鮮総督府庁舎の残骸の画像が加わるなどの変化を見せるものの、基本的に大きく変化することはない。第24版(2009年)を最後に独立した観光対象として紹介されなくなる。

第25版(2010年)以降は、「天安・牙山(温陽温泉)」の概要の中で、天安から「独立記念館や温陽温泉方面への市内バスが頻繁にある」と言及されるに留まっている(360頁)。

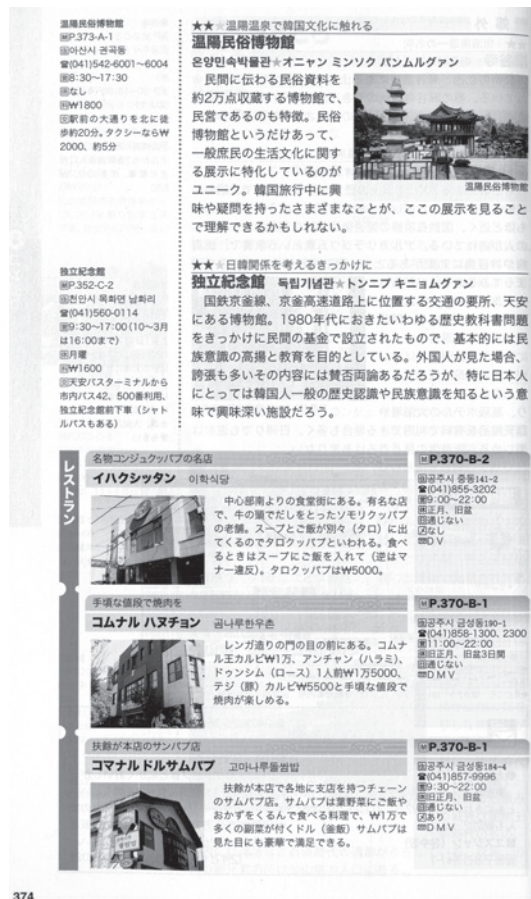


図4. 第18版(2003年)の独立記念館

VI. 考察

1. 台湾編との共通点：批判的語りから中立的言及への変化

以上のデータを元に本節では若干の考察を試みたい。筆者はこれまで本研究と同じ問題関心から台湾の事例を分析したことがある(岩田, 2011)。そこで明らかになったのは、『地球の歩き方ガイドブック』台湾編における植民地統治の記述が、＜批判力のある表現でコラムや特集を中心に過去を語る＞という傾向から＜より中立的な用語を用いて各紹介文の中で過去について言及する＞という傾向へ変化が生じているということであった (ibid.)。

これまで論じた事例を見ると、こうした変化は、台湾編ほどの量ではないものの、韓国編にも指摘できることが分かる。ソウル市の紹介文における「日本の支配」、安重根義士記念館の紹介文における「いやし難い傷」や「不要な、不愉快な緊張」、「抗日運動」という言葉遣い、さらには贖罪の姿勢は、すべて年を追うごとに使われなくなっていく。独立記念館の箇所が使われた「日帝時代」という言葉についても同様だ。

こうした用語は、大抵の場合「日本統治」というよりニュートラルなニュアンスを持つものに入れ替わっていく。また、安重根義士記念館の説明では、「植民地」という表現が「保護国」に入れ替わる事例も見た。

さらに、当初独立記念館はボックステキストでコラムのような特別な位置を与えられていたが、それも普通の観光名所と同じ扱いに格下げされていく。同様のことは、本稿で取り上げなかった西大門独立公園(ソウル市)にも言える。同公園は第16版(2001年)をさかいにボックステキストから普通の観光名所に格下げられている。

その一方で、日本による植民地統治が、次第に「日本統治」などのニュートラルな表現で言及されようになる事例も紹介した。たとえば、鐘路や明洞、梨泰院・龍山の箇所である。また、南山公園を「もとは朝鮮神宮境内だった」と簡潔に言及する部分も加えてもいい。それは、帝国主義や植民地主義に立ち入らずに、単なる歴史上のつながりを指摘するに留めるような言及である。

このような変化が生じた背景として次の二点を挙げることができる。第一が、韓国社会の変化に応じたというものである。すなわち、「日帝残滓」などと呼ばれてきた植民地統治期の建造物や「敵産家屋」(植民地時代に作られた日本家屋のこと)が近年文化財指定を受けるようになっていく社会情勢の変化に呼応して、ガイドブックでも紹介されるようになったという展開だ⁹⁾。第二が、「植民地」という用語を用いずに統治に頻

9) 東アジアの植民地建築を研究する西澤によれば、植民地建築の研究と保存活動は東アジア各地で1990年代から盛んになっているという(西澤, 2011: 269)。韓国の事例については(永島, 2012: 111)でも言及されている。(鄭, 2005)の出版もこうした流れの一つと解釈できる。

繁に言及することで、植民地支配というネガティブな過去が持つ意味を薄める効果が期待できるというものである。これら二点はともに、台湾編にも当てはまる¹⁰⁾。

2. 台湾編との相違点：韓国との対抗

相違点も指摘しておこう。第一の相違点は、<より中立的な用語を用いて各紹介文の中で過去について言及する>という事例が台湾の場合ほど多くないという点である。たとえば、2014 年刊行の『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ韓国編と台湾編で「日本統治」と「植民地」という用語が表れる頻度を概算すると、表 1 のようになる。韓国編と台湾編の間には三倍以上の開きがある。また、双方ともに「日本統治」と比べて「植民地」という用語が圧倒的に少ないことも興味深い。

表 12014 年刊行韓国編ならびに台湾編における語彙数の比較

	韓国編	台湾編
“日本統治”	24	86
“植民地”	1	4

注) 単位：箇所。

第二の相違点は、かつての植民地であった韓国台湾両社会への臨み方の違いである。台湾編では、台湾社会の歴史観や国家のシンボルを一方的に低く評価したり、疑問を呈したりすることはない。むしろ、植民地統治でさえも台湾の歴史の一部とみなす台湾社会の“親日”傾向に乗っかるような形で、植民地統治期のヘリテージと現代の台湾の社会・文化が観光対象として楽しく描かれる。

それとは逆に韓国編では、韓国社会の「民族の英雄」の評価を減じることもあれば、韓国社会の歴史認識に疑問を投げかけることもある。端的に言えば、韓国社会の意に反するような傾向を強めてきたのである。

さらに、韓国社会に反論を試みているように思えるときさえある。たとえば第 18 版(2003 年)に出現した「多角的な歴史観」という箇所を見てみよう(図 5)。これは、同版の巻末の章「旅の準備と技術韓国を知る」の「韓国よもやま話」という節に加えられたもので、最新の第 28 版(2013 年)でも記載されている。

ここで疑問文形式で列挙されている問いは、いずれもいわゆるネトウヨがネット上で激論を闘わせる光景を想起させるものだ。文脈から判断すると、これらの問いは韓国社会の「混乱や拡大解釈」(第 18 版、483 頁)への反論として提起されていると解釈して

10) 台湾における植民地統治期の建造物の文化財認定については(上水流、2007)が詳しい。もっとも韓国と台湾で文化財認定の理由付けや作業、認定数などにおいて少なからずの違いが存在するであろうことは軽視すべきではなかろう。

良い。たとえば「日本の文化は全韓国起源なのか」という問いやハングルに関する疑問など、大ヒットした『マンガ嫌韓流』の中で命題化されているものがいくつも見受けられる(山野, 2005)。とくに、伊藤博文に関する箇所は、前述の安重根義士記念館の節で論じた伊藤の評価の変化が連想され、興味深い。

「多角的な歴史観」は次の言葉で締めくくられる。

観光の際も、現代の価値観で歴史を読み解くのではなく、時代背景や国際情勢を考慮したり、異なる解釈の資料にあたったりして、多角的、実証的な歴史観でのぞみたい。

この一文を、異なる社会の歴史認識を多角的な視点から理解することを促しているというように好意的に

解釈することも可能であろう。けれども、文脈から見て、むしろ、韓国社会の「混乱や拡大解釈」に惑わされないように気をつけるべきだという日本人旅行者への忠告と読むほうが妥当である。韓国批判と受け取られる可能性を減らすために、こうした好意的にも解釈しうる表現が意図的に選択されていると読みとることもできる。

3. 2000年代初めという転換点

前節の事例分析から明らかになったもう一つの事実は、大きな変化が2000年代初めに生じているということである。この転換は、日韓関係をめぐる日本社会の韓国言説を反映していると考えるのが妥当であろう。

1980年代はいわゆる歴史教科書問題を通じて日本の戦争認識や近隣諸国から厳しく追及された時期である。また、1980年代は、「韓国の苦境」の主因を日本に求める人こそ「良心的な日本人」だとするいわゆる「贖罪史観」が存在した時期でもあった(小倉、

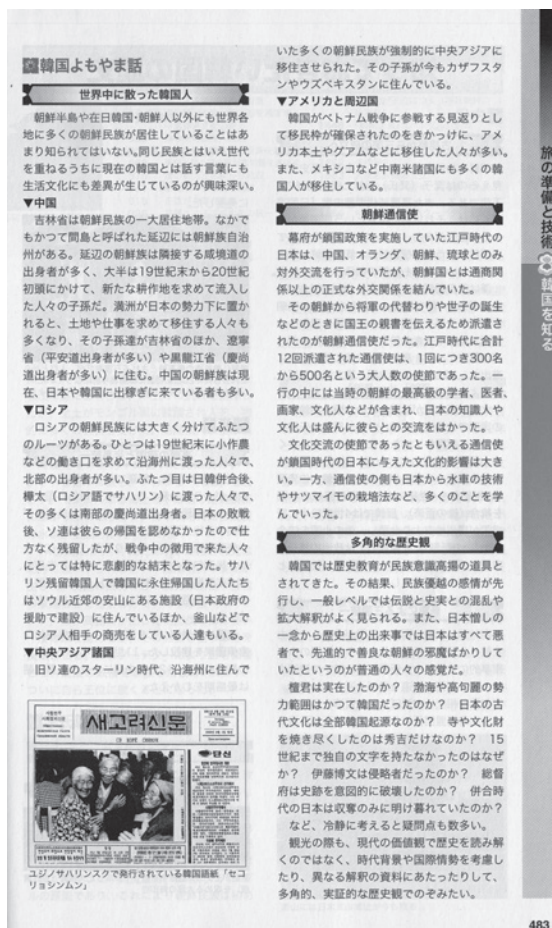


図 5. 第 18 版 (2003 年) の「多角的な歴史観」(右下部分)

2012：14-15)。

第2版の安重根義士記念館の紹介文に表われた居心地の悪さはこうした「贖罪史観」と基本的に同じものだと考えることができる。そこでは、植民地統治の責任は日本側にあり、それを受け止めた上で同館を訪問し、「新しい視点」から日韓関係を考えることが提唱されている。また、こうしたスタンスは、韓国への「肯定的な見方」、「善意」に満ちたステレオタイプを想起させる（木村、2004：32-34）。この見方に立てば、新しい日韓関係は「若く、純粋な市民による直接交流」によって築かれるべきとなる（ibid, 34）。

対照的に2000年代に入ると、韓国に対抗するようなスタンスが目立つようになる。この変化も、日本社会の変化に呼応したものだといえる。2005年に発表されたマンガ『嫌韓流』のヒットは、今日の日本社会におけるアンチ韓国の動きを象徴するものの一つと捉えられている。けれどもこうした嫌韓ブームは突如として生まれたわけではない。1990年代の経済的停滞の中で「謝罪する日本」と「右」という相反する立場が拮抗し、そのせめぎ合いを通じて（小針、2012：280-282）、後者すなわち、いわゆる自由主義史観のような中韓を競争相手と位置づけるナショナリズムが徐々に勢力を広げてきた。嫌韓ブームはこうした展開の中で生まれたものであった（木村、2007：216-217）。

このように、本稿で論じてきた韓国編に見られる変化とは、かなりの程度実際の政治的・社会的次元から影響を受けたものとも言えるのである。

VII. おわりに

以上、本稿では『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの韓国編における植民地統治の表象を、ソウル市、安重根義士記念館、そして独立記念館に焦点を絞って分析してきた。その結果明らかになったのは、第一に台湾編と同じような展開、つまり批判的な語りから中立的な言及への変化が見られる点であり、第二が韓国社会の歴史認識に対抗するような言説が増加する点、そして第三が日本社会の韓国への姿勢を反映するような形で2000年代初めに表象の転換が生じるという点であった。

本稿では三つの事例に限定したが、今後の考察では、先に言及した西大門公園などの例や、韓国編の韓国史に関するパートなども含めて分析する必要がある。また、本稿では、木浦や群山、九龍浦など、植民地の遺物がいわゆる近代遺産として観光資源化する例も十分に取り上げることができなかった。さらに、2000年代にメジャーな観光資源となった韓流も含めて分析すれば、日本発の韓国観光の理解が一層深まると考えられる。こうした研究は今後の課題としたい。

参考文献

- 注)『地球の歩き方ガイドブック』シリーズは多数になるので、例として一冊のみ記載している。
- 岩田晋典 2011「旅行メディアに見る植民地時代：『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・台湾編を中心に」『文明 21』第 27 号、135-156.
- 小倉紀蔵 2012「いま、韓国をどう見るか」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣.
- 上水流久彦 2007「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』第 8 号：84-109.
- 木村幹 2004『朝鮮半島をどう見るか』集英社.
- 木村幹 2007「ブームは何を残したか：ナショナリズムの中の韓流」石田佐絵恵子・他編『ポスト韓流のメディア社会学』ミネルヴァ書房.
- 小針進 2012「日韓関係：戦後両国はどう眺め合ってきたか」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣.
- 「地球の歩き方」編集室（編）2003『地球の歩き方 D12 韓国 2003?2004 年版』、ダイヤモンド・ビッグ社.
- 鄭銀淑 2005『韓国の「昭和」を歩く』祥伝社.
- 永島広紀 2012「韓国の歴史：「大韓民国」史へのまなざし」小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣.
- 西澤泰彦 2011『植民地建築紀行：満州・朝鮮・台湾を歩く』吉川弘文館.
- 山野車輪 2005『マンガ嫌韓流』晋遊舎.